



Kenneth
MacMillan's
Manon

全3幕7場

マノンとマルグリット

（それぞれの愛）

村田京子

Murata Kyoko

アベ・プレヴォーの『シュヴァリエ・デ・グリューとマノン・レスコーの物語』(通称『マノン・レスコー』)は、1731年にオランダのアムステルダムで出版された。「アベ(Abbé: 司祭)」という名前の通り、作者はカトリックの僧侶で『フランス教会史』の編纂の傍ら執筆したのが、7巻本の『世間から引退した貴人の回想と冒險』であった。『マノン・レスコー』はその最終巻の最後に組み込まれた一つのエピソードで、ルノンクール侯爵こと「貴人」がデ・グリューという青年から聞いた話として綴られている。このエピソードがヨーロッパ全土で人気を博したため、『マノン・レスコー』は本体から切り離されて単行本として出版された。とりわけ19世紀のロマン主義時代から世紀末にかけて何度も再版され、戯曲やオペラ、バレエなど様々なジャンルで取り上げられるようになり、現在でも人気のある題目となっている。

『マノン・レスコー』は、恋愛小説の原型としてロマン主義文学のルーツをなし、マノンは「娼婦的な女性」の表象とみなされている。それゆえ、マノンはメリメのカルメンや、アレクサンドル・デュマ・フィスの椿姫としばしば対比された。実際、『椿姫』(1848)の物語は、「語り手」が「椿姫」とマルグリット・ゴーチエの形見の本『マノン・レスコー』を競売で買うことから始まるし、小説の随所にマ

ノンの名が現れる。それだけプレヴォーの小説がデュマ・フィスに及ぼした影響は大きく、『椿姫』は『マノン・レスコー』の焼き直しとみなされるほどだ。ここでは、マノン・レスコーとマルグリット・ゴーチエの共通点および相違点を、それぞれの小説の社会的背景を考慮に入れながら検証していきたい¹⁾。

1: 詳細は拙著『娼婦の肖像—ロマン主義的クルチザンヌの系譜』(新評論、2006年)を参照のこと。



二つの小説を読み比べて見るならば、世間知らずで純情な青年が、同じ年頃ではあるが経験や知識で数段勝る魅力的な女性に一目惚れをし、彼女の言動に振り回されるという同じ恋愛のパターンに気づくであろう。マノンとマルグリットはどちらも美貌だけではなく、子どものような「天真爛漫さ」と、情熱的で「肉体的な操」を物ともしない奔放さを合わせ持つ存在で、その相矛盾する性質が「謎」となって男たちをその魅惑の虜にしている。18世紀当時、女が結婚前に操を失えば、どんな場合でも「娼婦」扱いされ、デ・グリューと駆け落ちしたマノンは、男たちに値踏みされる「商品」とみなされた。その中でデ・グリューのみが彼女を心から愛し、マノンも彼に対して「心の操」を守っている。その証拠に、お金を得るために好色な老貴族のもとに彼女が走った時、デ・グリューに宛てた手紙の中で彼女は、彼こそが「心の偶像」であり、「あなたを愛するような形で私が愛せるのは、世の中であなたしかいません」と誓っている。マルグリットもまた、クルチザンヌ(高級娼婦)である彼女をアルマンが娼婦扱いせず、激しく

咳き込む彼女の身を心から案じる様子に感動して彼の恋人となる。そしてデ・グリューとアルマンは、恋人に何度も裏切られながらも、その真摯な愛によって彼女の内に眞の愛情を目覚めさせることになる。

『マノン・レスコー』では、不実なマノンの心に変化が訪れるのは、彼女が「娼婦」としてアメリカの植民地スーザン・ロルレアンへの流刑に処せられた時であった。デ・グリューが全てを棄てて彼女についていく覚悟であることを知った時、彼女は激しく感動し、自らの「浮ついた心を咎めている」と言って、さめざめと涙を流す。スーザン・ロルレアンの首長の甥セヌレが彼女と結婚したがっていることを知った時も、植民地の絶対権力者になびくことなく、デ・グリューに従って不毛の砂漠への逃避行を選ぶのである。そこで力尽き、彼への永遠の愛を誓いながら死んでいく。「砂漠」は「純粹性と禁欲的精神主義を取り戻すための場所」(アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』)であり、「砂漠」は言わば、マノンが悔悟によって清められる場所となり、苦難を経ての彼女の死は崇高



サン＝スュルピスの僧院にマノンが姿を現した場面
(左: グラヴロ画 1753 右: ジョアノ画 1839)

右はロマン主義時代に絶大な人気を誇った挿絵画家トニ・ジョアノのものである。左の1753年版の挿絵と比べると一目瞭然だが、ジョアノの場合、主人公2人の若さ、その初々しさが際立っている。マノンの衣装、髪形もその可憐なイメージを引き立たせている。注目すべきは、二人の人物が同じ構図(男が立ち、女が座っている)でありながら、その態度に大きな違いが見いだせることだ。左の図ではマノンは毅然とした態度で、デ・グリューに弁明している。それに対し、右の図ではマノンに非難の眼を投げかけるデ・グリューに対して、彼女は反省するかのようにうなだれている。さらに、背景にはキリストの磔刑図が配置され、キリスト教的な道徳観の表現が垣間見られる。

なものとして描かれている。19世紀のロマン主義作家たちが、この「崇高い死」に見いだしたのが「恋するクルチザンヌ」、すなわち「愛の炎で浄化されるクルチザンヌ」のテーマであった。

一方、『椿姫』では、自由奔放に生きてきたマルグリットに精神的な変化が起こるのは、アルマンと一緒にパリ郊外の田舎に出かけ、自然に触れるようになってからである。都会の喧騒から離れ、自然の中に生きる彼女はアルマンにとって、贅沢と放埒を好むクルチザンヌから「最も純潔な婚約者」へと変容する。マルグリットが『マノン・レスコー』をしばしば読むようになるのは、この頃である。「女が本当に愛するようになったら、マノンのようなことはできない」という彼女のセリフに裏づけられているように、彼女は真実の愛に目覚めた「恋するクルチザンヌ」に変貌している。彼女は最後には恋人の幸福のために身を引いて死んでいくのである。

このように、マノンとマルグリットには共通点が多く見いだせるが、大きな相違点もある。『マノン・レスコー』では、二人の恋人を妨げる存在として、デ・グリューの父親だけではなく、放蕩者の老貴族、マノンを流刑に処する警視総監、スーザン・ロルレアンの首長が抑圧的な「父」の役割を果たしている。この小説の舞台となる摂政時代²⁾は「風紀の紊乱、好色な貴婦人たち、悪人ぶることをよしとした宫廷貴族の時代」(アラン・ドゥコー『フランス女性の歴史』)であり、腐敗、堕落した文明側に立つ「父」と、自発的な愛情を優先し「心」を重んじる「子ども」の対立という構図で、この小説を読み解くことができる。それに対して『椿姫』では、息子の意志を妨げる「父」の役割を果たすのはアルマンの父親のみである。しかもブレヴォーの小説では、「父」の意志に逆らう「子ども」を投獄させるなど、社会的な懲罰を下す強力な父権が描かれているが、デュマ・フィスの小説では「父」の影響力はより内在的な形で現れる。

2: ルイ14世の死後、その後を継いだ孫のルイ15世がまだ幼かったため、1715年から23年にかけてオルレアン公フィリップ2世が摂政として政治を行った。

そもそもアルマンの父親が田舎から息子の元に駆けつけたのは、息子が母親から相続した財産をマルグリットのために使おうとしたためで、彼は家の財産が失われることを最も懸念している。それは19世紀のブルジョワ的な価値観に基づくものだ。父親は貞潔を重んじるブルジョワ道徳の体現者として、「罪の女」マルグリットに「天使のように純潔な」アルマンの妹を対峙させ、この「清純な乙女」の幸せな結婚のために、マルグリットに犠牲を強いている。その上、「純粹無垢な感情は、完全に純潔な女においてしか存在しない」という彼の言葉にあるように、「処女」と「娼婦」の対立は、善／悪、美德／悪徳といった二項対立に置き換えられていく。実際、当時の社会においては両者の間には乗り越えがたい壁が存在していた。

したがって「娼婦」がその罪を贖い、「純粹無垢な感情」を取り戻すには、現世での幸福を諦め、愛する男のために自分を犠牲にするしかない。マルグリットはこうした「父」の言葉に反発するどころか、それを受け入れ、愛の「殉教者」になることを決意する。要するに、抑圧の対象であるマルグリット自身が、「父」の体現するブルジョワ道徳を自らの内に取り入れているわけだ。しかも、彼女に裏切られたと思い込んだアルマンによって屈辱的な目に合わされながらも彼女は黙って耐え、「聖女」として死んでいくのである。

以上のように、『椿姫』では恋人のために自分の身を犠牲にするマルグリットの愛が強調され、そこに彼女の存在意義があった。それに対して、ロマン主義の詩人アルフレッド・ド・ミュッセが「ナムーナ」と題される詩の中で、マノンを「生き生きと」して「真に人間的」だとみなし、「ああ！お前は軽はずみだがお前が生きていたならば、どれほどお前を愛したことだろう！」と謳っているように、マノンにおいてはむしろ、男の論理では測りがたいその自由奔放さが男の心を惹きつけてやまなかつたと言えるだろう。

(フランス文学／大阪府立大学教授)